幼年教育研究年報　第24巻
The Annual Research on Early Childhood, 2002, **24**,41-47

研究論文

母親の独立・相互依存的自己理解と発達期待が幼児の向社会性に及ぼす効果

樟本　千里[1]・山崎　晃[2]

The Effect on Independent and Interdependent Construal of the Mother's Self and Mother's Expectations of Development to Children of the Prosocial in Preschooler

Chisato Kusumoto[1] and Akira Yamazaki[2]

The present research examined the influence of understanding of self of mother and the development expectation of children's prosocial behavior. Twenty-five mothers were requested to answer to the following three variables: (1) child's prosocial behavior, (2) independency and interdependency of mothers', and (3) expectation of development to their child. Analyses were conducted between male and female. Main results were as follows: (1) For the boy, there were negative correlation were between mother's interdependency and expectancy of development, and child's prosocial behaviors. (2) For the girl, there was a positive correlation between mother's interdependency and child's prosocial behaviors. These results suggested that independent and interdependent construal of the mother's self and mother's development expectation are related to children's prosocial behavior.

Key Words:prosocial, independence, interdependence, expectations of development.

問題と目的

人を思いやる心はどのような環境の中で育まれていくのだろうか。相手のことを考え，困っている人を助ける心を育てることは，教育的にも重要な課題である。一般に「思いやり」と呼ばれるものは，心理学の中では向社会性の問題として多くの研究がなされている。向社会的行動は愛他行動や援助行動の上位概念であり，向社会的行動は他者のためになると社会的に是認される行動全般を指し，動機の如何は問わない（杉森，1996）。一般に向社会的行動の発達的研究は，向社会的行動を支える心理特性として共感性と関連付けられていることが多い（菊地，1991：澤田，1992：杉森，1996）。そこでは，共感性を「思いやり」，「愛他心」あるいは単に「感情の共有」などと表現しているものもある。本研究では，向社会的行動を向社会性行動側面，共感性向社会感情側面とし，この2側面を合わせて向社会性と呼ぶこととする。

子どもが日常生活で向社会性を形成するさいには，家族（特に親）の要因が非常に重要である。なぜなら，子どもは，ある特定の家族と文化的文脈の中で成長するからである。これらの文脈は子どもに許される行動選択と養育行動の中で強調される価値の両方によって大きく異なっている。養育環境の最も際立った違いは，都市部と農村部の比較や，西欧文化と非西欧文化とを比較した人類学者によって明らかにされている。向社会性は，親や学校による社会化という直接的な影響だけでなく，自分自身が生活している文化や社会構造から間接的な影響を受けているのである。

私たち日本人の向社会的行動は，自らの価値や規範にそってなされるというよりも，むしろ他者と一致し

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2　広島大学教育学部附属幼年教育研究施設教授

た感情や他者からの承認に基づいているといわれていることは，Markus & Kitayama(1991)が述べる，自分を抑制し他者との関係性，すなわち他者の気持ちを汲みながら適切な行為を行うことを重視する自己のあり方と関連していると考えられるのである（伊藤・平林，1997）。

さらに，Eisenberg & Mussen(1989)は，フロイトによって導入され理論化された同一視の概念は，人間的価値と向社会的行動の内面化の点において重要であると述べている。同一視はモデリングの類似概念であるが，モデリングは単に他人の反応をコピーすることを指すのに対して，同一視は広く行動や動機，思考などのパターン（型）をとり入れる過程を意味している（Eisenberg & Mussen, 1989）。

つまり，Markus & Kitayama(1991)は，自己認知の在り方の違いが，社会的行動の差を生じさせると考え，自己認知の違いについての理論を提出しているが，この自己認知の在り方にも同一視が起きている可能性がある。

さて，Markus & Kitayama(1991)の提唱する「独立的」対「相互依存的」のセルフ論においてとりわけ自己の意思・欲求・権利と、他者・集団の意図や和とが対立・葛藤する場面で、自己と他者のいずれを配慮して行動するかが競り合う社会的対人行動に深く関連していると考えられている（柏木・北山・東，1997）。

自己と社会（他者）との関係性の中で、“自分の個性や能力を発揮し、自己実現したい”という（独立に基づく）欲求は誰しもが持っているものである。また同時に、“他者と親密な関係を作りたい、社会にうまく適応していきたい”という（相互依存に基づく）欲求も我々は持っている。これらは時には対立し、葛藤を引き起こすこともあるが、どちらも人間の基本的な欲求であり、双方をバランス良く備えていることがよりよい心理・社会的適応のための条件であると考えられる（橋本，1999）。

この人間のもつ2面性に焦点を当て，木内(1995)は，Markus & Kitayama(1991)によって提出された“独立的自己理解”と“相互依存的自己理解”という２つの概念区分に基づいて，独立・相互依存的自己理解尺度（SII）を作成した。この尺度は，“2つの自己理解が個人の中に両方形成され，2つの自己理解の総体的な優位性が社会的行動の個人差を生じさせる”という仮設モデルに基づいた，個人差を測定する1次元の尺度である（木内，1996）。本研究では，このSIIの尺度を用いて，母親の自己理解と子どもへの発達期待を測定する。

ところで理論的にいえば，向社会的行動には性差があると考えられている。しかしながら，先行研究では一貫した性差は見出されていないのが現状である（Bar-tail, Raviv, & Goldberg, 1982）。女性の方が向社会的であるという結果がやや多いものの，この結果はある程度人為的なものであると考えられている（Eisenberg & Mussen, 1989）。また，男性と女性とでは求められる向社会的行動が異なるとも考えられる。Eisenberg & Mussen (1989)によれば，男性は危険性の高いものや騎士道的な行動において女性より援助的であり，対照的に，心理的な援助や友人や知り合いを助けるといった場合において，女性の方が援助的であるという。すなわち向社会性における性差は，いくつかの様々な要因が背景にあると考えられるのである。その要因の1つに，文化的な社会的環境や親の発達期待が考えられるのである。

よって，本研究では，幼児の対人行動である向社会的行動に焦点を当て，母親の独立・相互依存自己理解と子どもへの発達期待との関連を検討する。その際，幼児の性によって，環境要因である母親の自己理解や，子どもへの発達期待が，幼児の向社会性の発現に及ぼす効果が異なるであろうことを明らかにする。

方法

被験者

広島県H市内の幼稚園年長クラスの男児12名，女児13名，合計25名とその母親。

調査尺度

幼児の向社会性測定（母親評定）　向社会性の行動側面を測定するために，平井・帆足(1999)の「思いやりの行動観察項目」の中から，相手の気持ちをくもうとする項目を5項目，相手を援助しようとする表出項目を4項目，その他の項目を4項目，合計13項目を抽出した。さらに，向社会性の感情側面を測定するために，共感的項目として7項目を追加し，合計20項目を「幼児の向社会性項目」とした。

幼児の母親に，「幼児の向社会性項目」に対して，家庭や近所の遊び場でそれぞれの項目の行動がみられるかどうかについて尋ねた。回答は，「よくある」と「ほとんどない」を両極とする5段階での評定を求める形式をとった。

母親の独立・相互依存的自己理解の測定　木内(1995)が開発した，「独立・相互依存的自己理解尺度（SII）」を使用した。SIIは計16項目から構成される尺度であり，各項目に対して自分はどちらのタイプだと意識しているかについて尋ねた（range16-64）。回答形式は“Aにぴったり当てはまる”“どちらかといえばA”“どちらかといえばB”“Bにぴったり当てはまる”の4件法である。なお，対象が専業主婦層であったため，項目

の一部に括弧つきで言葉を挿入した。(Aが相互依存的自己理解の項目であり,Bが独立的自己理解の項目である。項目はAppendixを参照)“Aにぴったり当てはまる”を4点,“Bにぴったり当てはまる”を1点として得点化した。得点が高いほど,相互依存的自己理解が高いことを示す。

母親の発達期待の測定　上記で使用したSIIを使用し,各項目に対して,子どもの将来に期待する理想のタイプはどちらであるかについて尋ねた(range16-64)。回答形式は“Aタイプの人になってほしい”“どちらかといえばAタイプになってほしい”“どちらかといえばBタイプになってほしい”“Bタイプの人になってほしい”の4件法である。“Aタイプの人になってほしい”を4点,“Bタイプの人になってほしい”を1点として得点化した。得点が高いほど,相互依存的な行動特徴を子どもに期待していることを示す。

結果

1. 幼児の向社会性の構造

「幼児の向社会性項目」の回答に対して「よくある」を5点,「ほとんどない」を1点として得点化した。得点が高いほど向社会性が高い傾向を示す。母親から見た子どもの向社会性が行動と感情の2つの構造から成り立っていることを確認するために,向社会性の行動側面13項目,感情側面7項目,計20項目について,主因子法(バリマックス回転)による因子分析を行った。その結果,2因子を抽出した。この因子分析結果において因子負荷量0.5にみたない,6項目を除くことにして再度因子分析をおこなった。分析の結果,向社会性の行動側面として7項目,感情側面として7項目の14項目を,幼児の向社会性尺度(母親評定)の項目とすることにした(表1)。下位尺度を構成する項目得点合計をその項目数で割ったものを「向社会性行動得点」,「向社会性感情得点」とした。

尺度の信頼性を検討するためにCronbachのα係数を求めたところ,行動側面が.79,感情側面が.91となり,尺度の信頼性が確認された。

2. 各項目得点の性別平均得点と標準偏差

母親の自己理解,子どもへの発達期待,幼児の向社会性行動得点,幼児の向社会性感情得点の平均と標準偏差を表2に示す。それぞれの項目ごとに,幼児の性による1要因分散分析をおこなった結果,母親の自己観($F(1,23)=0.00$, ns),発達期待($F(1,23)=2.47$, ns),向社会性行動($F(1,23)=0.00$, ns),向社会性感情($F(1,23)=2.32$, ns)のすべてにおいて性差はみられなかった。

3. 幼児の性,母親の自己理解の組み合わせと幼児の向社会性

母親の自己理解得点の平均値で高得点群(range:45-55)・低得点群(range:34-44)に分けた。幼児の向社会性行動得点および感情得点に関して,幼児の性と母親の自己理解得点の高低を2要因とする分散分析をおこなった。

まず,幼児の向社会性行動得点に関して,幼児の性と母親の自己理解の交互作用がみられた($F(1,21)=8.81$, $p<.01$)。図1は母親の自己理解高低群別に幼児の向社会性行動平均得点を示したものである。LSD法を用いた多重比較をおこなった。その結果,低得点群の母親を持つ男児の方が,低得点群の母親を持つ女児よりも,向社会性行動得点が高いことが示された($p<.0$

表1　「幼児の向社会性」項目の因子分析結果

	感情	行動	共通性
人の考えを絶えず読み取ろうとしている。	0.72	0.22	0.86
友達の様子に関心を示す。	0.77	0.12	0.87
周囲の状況によく気がつく。	0.80	0.06	0.84
他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない。	0.80	-0.24	0.85
人の気持ちを理解するように心がけている。	0.81	0.07	0.89
人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じとる。	0.85	-0.13	0.85
他者の態度や表情を気をつけて見ている。	0.88	-0.03	0.85
困ったり悲しんでいる人の様子をみて声をかける。	-0.19	0.53	0.70
わからないでいる他児に教える。	-0.12	0.72	0.83
自ら他児の面倒をみる。	-0.05	0.80	0.71
生き物の死に対して悲しむ。	-0.02	0.63	0.68
相手の身体などのハンディ(けが・病気)に気づき自然に助ける。	0.03	0.69	0.68
年下の子どもに対し心づかいをする。	0.10	0.69	0.50
様子をみて助けてあげる。	0.26	0.59	0.66
説明済	4.68	3.29	
寄与率	0.33	0.23	
α係数	0.91	0.79	

表2　性別の平均値と標準偏差

	男児N=12		女児N=13	
	平均値	SD	平均値	SD
母親の自己観	44.7	5.7	44.6	6.4
母親期待	33.3	6.3	37.0	5.7
向社会性行動得点	2.9	0.8	2.9	0.8
向社会性感情得点	2.2	0.9	2.6	0.6

5)。また，低得点群の母親を持つ女児と，高得点群の母親を持つ女児を比較すると，高得得点群の母親を持つ女児の方が向社会性行動得点が高いことが示された($p<.01$)。

次に，幼児の向社会性感情得点に関して，幼児の向社会性行動得点に関して，幼児の性と母親の自己理解の交互作用がみられた（$F(1,21)=7.26$, $p<.05$)。図2は母親の自己理解高低群別に幼児の向社会性感情平均得点を示したものである。LSD法を用いた多重比較をおこなった。その結果，低得点群の母親を持つ男児が，高得点群の母親を持つ男児よりも向社会性感情得点が高いことが示された（$p<.01$)。また，高得点群の母親を持つ男児よりも，高得点群の母親を持つ女児の方が向社会性感情得点が高いことが示された（$p<.01$)。

4. 幼児の性，子どもへの発達期待の組み合わせと幼児の向社会性

子どもへの発達期待得点の平均値で高得点群(range:36-43)・低得点群（range:22-35）に分けた。幼児の向社会性行動得点および感情得点に関して，幼児の性と子どもへの発達期待得点の高低を2要因とする分散分析をおこなった。

まず，幼児の向社会性行動得点に関して，すべての要因において有意な効果はみられなかった。図3は子どもへの発達期待高低群別に幼児の向社会性行動平均得点を示したものである。

同様に，幼児の向社会性感情得点に関しても，すべての要因において有意な効果はみられなかった。図4

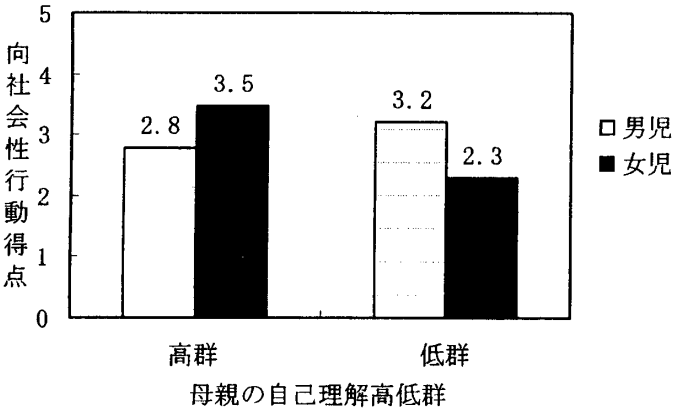

図1　母親の自己理解と子どもの向社会性行動得点

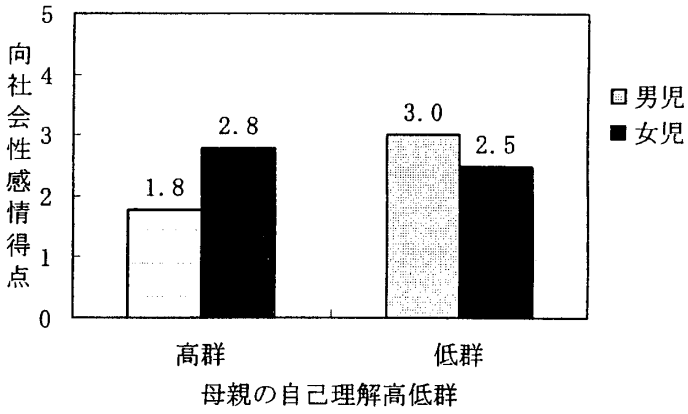

図2　母親の自己理解と子どもの向社会性感情得点

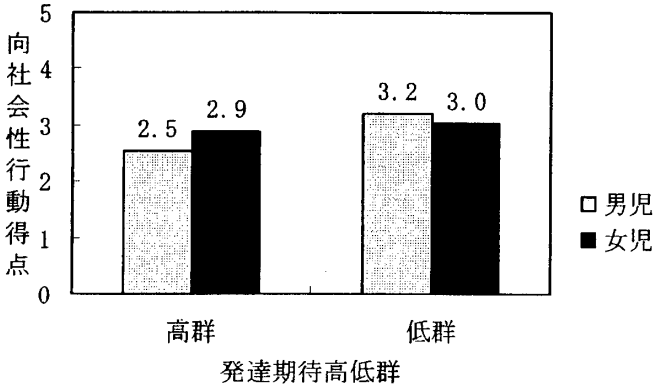

図3　発達期待と子どもの向社会性行動得点

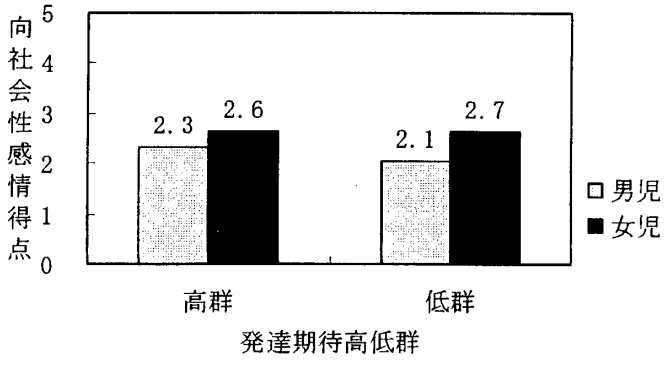

図4　発達期待と向社会性感情得点

は子どもへの発達期待高低群別に幼児の向社会性感情平均得点を示したものである。

5. 母親の自己理解および子どもへの発達期待と幼児の向社会性との関連

母親の自己理解得点と子どもへの発達期待得点が幼児の向社会性をどの程度予測しうるかを調べるために，向社会性行動得点および向社会性感情得点を目的変数，母親の自己理解得点と子どもへの発達期待得点を説明変数として重回帰分析をおこなった(表3)。

その結果，男児では向社会性行動得点に対しては，子どもへの発達期待が負の影響力を持つことが明らかになった（$\beta=-0.71$，$p<.05$）。また，向社会性感情得点に対しては，母親の自己理解が負の影響力を持つことが明らかになった（$\beta=-0.70$，$p<.05$）。

一方女児では，向社会性行動得点に対しては，母親の自己理解が正の影響力を持つことが示されたが（$\beta=0.66$，$p<.05$），向社会的感情得点に対しては説明率が低く，影響力は見出せなかった。

考察

本研究では，母親の独立・相互依存自己理解と子どもへの発達期待が，幼児の向社会性に及ぼす効果は幼児の性別によって異なることを明らかにすることを目的としていた。幼児の向社会性に関して，向社会性行動側面と向社会性感情側面の２側面についてそれぞれ検討をおこなった。

1. 母親の自己理解と幼児の向社会性行動との関連

母親の自己意識と幼児の性別によって，幼児の向社会性行動との関連を検討した結果，女児の場合には，相互依存的な自己観をもつ母親がいる幼児は向社会的行動をする傾向が高いことが示され，男児と女児では母親の相互依存的な自己観は，幼児の向社会的行動に異なる影響を与えていることが示唆された。また，どちらかといえば独立的な自己観を持つ母親がいる幼児では，男児のほうが向社会的行動をする傾向が高いことが示され，女児は逆に向社会的行動傾向が低いことが示されている。母親が相互依存的である場合には，子どもの向社会的行動傾向に性差はみられないが，母親が独立的である場合には，子どもの向社会的行動傾向に差がみられている。この結果は，独立的自己理解が自己を他から切り離されたものであると理解し，かつ，自己の中の誇るべき属性を見出し表現していく主体であることと，逆に相互依存的自己理解が，自己を他の人々と根本的に結び伝いていると理解し，かつ，特定の他者との強調的でもちつもたれつの関係を維持し，実現させていく主体である（木内，1996）ことを反映した結果といえるだろう。男児の場合より有能であること示すことができるような向社会的行動が多く，女児の場合は自分の周囲の人に対する世話や保護というような向社会的行動が多いという，Eisenberg & Mussen(1989)の見解からも納得のいくものである。つまり，男児の場合は独立的な母親への同一視が向社会的行動を促進させ，逆に女児の場合には相互依存的な母親への同一視が向社会的行動を促進させた結果であると考えることができる。独立的自己観の母親をもつ幼児において，向社会性の行動側面において男児と女児の間に差がみられたことも，行動する，すなわち自己を表現していくことに価値をおいているからであろうことが推察される。

表3　重回帰分析の結果(標準偏相関係数)

男児	向社会性行動	向社会性感情
母親の自己理解	-0.109	-0.703*
子どもへの発達期待	-0.71*	-0.116
説明率（R^2）	0.522*	0.514*
女児	**向社会性行動**	**向社会性感情**
母親の自己理解	0.659*	-0.163
子どもへの発達期待	0.027	0.187
説明率（R^2）	0.451*	0.034

*p<.05

2. 母親の自己理解と幼児の向社会性感情との関連

母親の自己意識と幼児の性別によって，幼児の向社会性感情との関連を検討した結果，男児の場合には，独立的自己観をもつ母親がいる幼児の向社会的感情傾向が高いことが示され，女児の場合には向社会的感情傾向に差がみられなかったことから，男児と女児では母親の相互依存的な自己観は，幼児の向社会的感情に異なる影響を与えていることが明らかになった。また，どちらかといえば相互依存的自己観を持つ母親がいる幼児では，女児のほうが向社会的感情傾向が高いことが示され，男児は逆に向社会的感情傾向が低いことが示されている。母親が独立的である場合には，子どもの向社会的感情傾向に性差はみられないが，母親が相互依存的傾向をもつ場合には，子どもの向社会的感情傾向に差がみられている。女児が向社会的行動の中でもいわゆる"身内に対する気遣い"を選好することを考えれば，周囲の人間との関係性に価値をおく相互依存的傾向の高い母親をもつ女児が向社会性感情傾向が高いことは，Eisenberg & Mussen(1989)の見解を裏付ける結果であると思われる。また，行動側面とは逆に，相互依存的自己観の母親をもつ幼児において，男児と女児の間に差がみられたことも，彼らの見解を支持するものであろう。

3. 幼児の向社会性を支えるもの

幼児の向社会性を規定する関連要因に注目して，得点の高低とは異なる別の面から，性差について検討し

てみたい。Markus & Kitayama(1991)のセルフ理論では，社会的対人行動は，独立的自己理解と依存的自己理解に大きな影響を受け，現実的構成機能をもつとされている。Markus & Kitayama(1991)によれば，個を優先させる社会と集団を優先させる社会では、それぞれの社会の価値づけにしたがって人々が行動し、心が発達するという。たとえば、前者に属する社会では、人々の行動の目標は自己実現に有り、後者の社会では、それが集団のためであるという。前者では、自己が他人や社会的状況とは独立に意識化され自尊感情も高いが、後者では自己は他人や状況無しには明確化されにくく自尊感情も低いというのである。

今回の結果は，まず男児では，母親の相互依存的傾向は，幼児の向社会性感情の低さを，子どもへの相互依存傾向への発達期待は，幼児の向社会性行動の低さを規定することが示された。対照的に女児の場合は，母親の相互依存的傾向が高ければ，幼児の向社会性行動も高まることが示されている。一般に男性においては自己主張や自己実現が社会・文化的に好ましいとされ，他方女性においては，つつましさや対人考慮の深さなどが望ましいとされている(岡本，1991)。本研究の結果は，男児はすでに独立的自己理解における価値づけに従って心を発達させ，逆に女児は相互依存的自己理解における価値づけに従って行動していることを示唆するものかもしれない。

4. 今後の課題

本研究では，母親の独立・相互依存的自己理解が，同一視のプロセスを経て，男児は独立的自己観，女児は相互依存的自己観の価値づけにしたがって，社会的対人行動の1つである向社会性を発達させていることが示唆された。しかしながら，親が子どもに対して願う発達期待都の関連は示されなかった。この点に関しては更なる検討が必要であると思われる。また，本研究は年長児を対象としているが，今回は検討できなかった発達的変化についても検討する必要があると思われる。

引用文献

Bar-tail, D., Raviv, A., & Goldberg, M. 1982 Helping behavior among preschool children: An observational study. *Child Development*, **53**, 396-402.

Eisenberg, N., & Mussen, P. 1991 思いやりの行動の発達心理 (菊地章夫・二宮克美，共訳) 金子書房 (Eisenberg. N., & Mussen, P. 1989 The roots of prosocial behavior in children. New York: Cambridge University Press.)

平井信義・帆足英一 1999 思いやりを育む保育 新曜社

柏木恵子・北山忍・東洋 1997 文化心理学 東京大学出版会

菊地章夫 1991 思いやりを考える．淡交社.

木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 *心理学研究*66, 100-106.

木内亜紀 1996 独立・相互依存的自己理解—文的影響，およびパーソナリティ特性との関連— *心理学研究*, **67**, 308 - 313.

Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and Self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

橋本知恵 1999 大学生の自己尊重傾向・関係尊重傾向がストレス過程に及ぼす効果 *明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要* 4, 49-64.

澤田瑞也 1992 共感の心理学—そのメカニズムと発達．世界思想社.

杉森伸吉 1996 共感性と向社会的行動 佐々木正人・湯川隆子（偏） 児童心理学の進歩—1996年版— 157-192 金子書房

岡本浩一 1991 ユニークさの社会心理学—認知形成的アプローチと独自性欲求テスト—川島書店

内田由紀子・北山忍 2001 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 *心理学研究*, **72**, 4, 275-272.

Appendix　独立・相互依存的自己理解尺度（木内,1995）

項　目
1.　A：まわりの人の意見に合わせる. B：自分の意見を主張する.
*2.　A：個性を発揮する. B：協調性を尊重する.
3.　A：まわりの人の期待に添うように，自分の考え方を合わせることが多い. B：自分の考え方は，まわりの人に批判されても，簡単には変わらないことが多い.
*4.　A：自分の気持ちに正直な態度をとる. B：まわりの人に合わせた態度をとる.
5.　A：どのようにしたら，まわりの人から期待された役割を果たせるかを，第1に考える. B：どのようにしたら，自分の能力を生かせるかを第1に考える.
*6.　A：まわりの人の反対受けても，自分の望むことは実行する. B：まわりの人の反対を受ければ，自分の望むことは抑える.
*7.　A：まわりの人の反対を受けても，自分の志は貫くことが多い. B：まわりの人の反対を受ければ，自分の志をあきらめることが多い.
*8.　A：まわりの人が望むことよりは，自分らしさを発揮する. B：まわりの人が自分の望むことをする.
9.　A：自分の才能を発揮することよりは，まわりの人に喜んでもらえるかを第1に考える. B：自分の才能を発揮する.
10. A：どのようにしたら，まわりの人に喜んでもらえるかを第1に考える. B：どのようにしたら，自分の能力を最大限に発揮できるかを，第1に考える.
11. A：まわりの人と利害の対立は避けることが多い. B：自分の権利や利益は，できるだけはっきり主張することが多い.
12. A：まわりの人がどのように思うかを考えて，自分の意見を言う. B：自分の意見は，いつも自身をもって発言する.
13. A：まわりの人の価値判断を考慮に入れて行動する. B：自分の価値判断に基づいて行動する.
14. A：何をするにも，人に1歩譲ることが多い. B：何をするにも，自分を押し通すことが多い.
*15. A：日ごろ，物事を決めるときは，自分一人の判断と責任によって決めることが多い. B：日ごろ，物事を決めるときは，まわりの人に相談してから決めることが多い.
*16. A：会議（話し合い）では，遠慮なく討論する. B：会議（話し合い）では，できるだけ控えめにしている.

＊は逆転項目